子供たちが語る「田辺市地域語り部ジュニア」

田辺市教育委員会

１．はじめに

田辺市は紀伊半島の南西部、和歌山県の南部に位置している。太平洋に面した田辺湾を臨み、黒潮の影響により、比較的温暖な地域である。人口は約６万７千人で西よりの海岸部に都市的地域を形成するほかは、森林が大半を占める中山間地域が広がり、総面積は 1026.89 ㎢と広大である。

平成 16 年７月７日、「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産として登録された。和歌山県・奈良県・三重県にまたがる３つの霊場(熊野三山、高野山、吉野・大峰)とそこに至る参詣道(熊野参詣道・高野町石道・大峰奥駆道)及びそれを取り巻く文化的景観が主役である。田辺市は、この世界遺産の中心に位置している。

２．教育目標

田辺市教育委員会では「未来につながる資質・能力の育成」「学社融合活動の内容充実」を学校教育推進の２本柱としている。「学社融合」とは学校教育と社会教育が一体となって学習の場、活動などをつくり、地域の教育力と学校の教育力を相互に活用する取組のことである。「田辺市地域語り部ジュニア」についても、学社融合の取組の１つとして行っている。田辺市にある世界遺産をはじめとする地域資源について学習することにより、ふるさとを愛し、地域に誇りをもった子供を育成することを目標としている。

３．教育委員会・学校での取組

【教育委員会の取組】

田辺市教育委員会では、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産登録 10 周年の記念の年を迎えた平成 26 年から、「熊野古道」を校区に抱える小中学校が、「熊野古道」と王子跡などを再度見つめ直して学習するとともに、その内容を保護者や地域の方々、またそれぞれの地域を訪れた方々に語り継ぐ、「田辺市熊野古道語り部ジュニア」の活動を始めた。翌年からは「熊野古道」に限定せず、校区の地域資源や産業について語れる子供の育成を目指し、名称を「田辺市地域語り部ジュニア」と改めて、市内全ての小中学校において、語り部活動を実施している。

教育委員会では、各小中学校での取組を集約し、この活動を継続、深化、充実させることを目指している。「地域が見える」「人と繋がる」「地域に広がる」の３観点を重視し、どのような地域資源について、どんな人と交流し、学習した内容をどのように発信して広げるかについてまとめており、中学校は語りの内容を英語でまとめている。

【学校の取組①：田辺市立本宮小学校】

本宮小学校は、「立志・協働・前進～自ら学び、認め合い、想い合い、支え合う仲間づくり～」を教育目標とし、ふるさと学習を核として、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の価値を自らの言葉で発信する語り部活動を行っている。児童は、「熊野本宮語り部の会」の講師や「世界遺産センター」の専門員を招き、熊野古道の歴史的・文化的意義について専門的な講話や指導を受け、古道を歩きながら案内する等、様々な体験を通してふるさとの良さを実感し、発信する活動を続けている。

今年度は、これまで実施していた「大日越えコース」から「三軒茶屋から大斎原コース」へと新しいルートに変更し、児童自らがその場所の魅力を再発見し、担当場所に応じた新たなガイド文を

作成した。実際に古道を歩きながら、講師の助言を基に自分の言葉で表現する練習を重ね、地域の魅力を語り継ぐ当事者としての自覚を深めた。また、近隣の三里小学校との連携では、互いに語り部発表を紹介し合うことで、共通点や差異に気づいたり、古道に関する知識を深めたりするなど、語り部の技能を高め合うことができた。

現地での語り部活動の様子

世界遺産センターの講師による出前授業

【学校の取組②：田辺市立秋津川小学校】

秋津川小学校は「賢く豊かに逞しく生き抜く力を育てる」を教育目標に、総合的な学習の時間を「みやしタイム」(「みつけよう・やってみよう・しらせよう」）と位置づけ、ふるさと学習を推進している。秋津川地区は紀州備長炭の発祥地であり、その製炭技術は世界農業遺産「みなべ・田辺の梅システム」を支える重要な文化的景観である。秋津川中学校とも連携し、小学校３年生から中学校３年生までの７年間にわたる小中一貫した系統的な学習プログラムを展開している。

児童は見学や調べ学習を通じ、伝統ある歴史や製炭プロセスを学習した。今年度は、前年度の高知県（土佐備長炭生産地）や宮崎県（宇納間備長炭生産地）とのオンライン交流で得た知見を土台に、備長炭の機能性に着目した。紀州・土佐・宇納間の３種の備長炭を用いた燃焼・調湿実験を行い、紀州備長炭の卓越した質を科学的視点から検証した。また、製炭士へのインタビュー等を通じ、伝統継承への使命感を深めた成果を保護者や地域に向けて発表した。

学習の集大成として、インバウンド需要を見据えた「英語版リーフレット」の制作にも挑戦した。これを備長炭公園や紀伊田辺駅に設置することで、地域文化を世界へ広める国際的な視点を養うとともに、学びを社会に還元する有用性を実感する機会となった。

リーフレット（成果物）

オンライン交流の様子

製炭士へのインタビュー

４．おわりに

「語り部ジュニア活動」を通した、地域の歴史、文化財、伝統産業等の学習は、子供たちが先人の努力や思いに触れ、地域社会の一員としてふるさとへの愛着を深める貴重な機会となっており、ふるさと学習を柱とした小中連携が進んでいる学校もある。その一方で、カリキュラム上の時間的制約や、継続的な地域資源・人材の発掘、指導を担う教員への負担や力量の維持といった課題も顕在化している。特に中学校においては、実践の場を工夫しているものの、英語を用いた語り部活動については、その機会の確保に苦慮している学校もある。

様々な機会をとらえ、子供たちがふるさとに関する知識を得るだけでなく、これからの社会で必要とされる資質・能力を育成し、自らの学びが社会に貢献しているという自己有用感を実感できる場の設定を考えていくとともに、今後も語り部ジュニア活動の継続と充実を図っていきたい。